

香港出張報告

松田京子

期間：2010年12月24日～30日

私は、2010年12月24日から12月30日までの7日間、アジア太平洋研究センターの研究支援をうけて香港に出張し調査を行った。その主な目的は、①日本軍占領下の香港の社会状況および対岸関係についての史料調査、②客家の習俗に関する実地調査の2点であった。以下では、それぞれの目的にそくして調査の概要を述べていきたい。

まず第1の目的に関して。周知のように、1941年12月から日本が敗戦するまでの約3年8ヶ月の間、香港は日本の軍事的な支配下におかれた。今回の調査では、日本占領下の香港の社会状況および当時の香港と日本の植民地であった台湾との関係を探求するため、香港中央図書館において、日本占領下でも発行され続けた中国語新聞『華僑日報』などの当該期の一次資料の調査・収集を行った。

今回、調査・収集した『華僑日報』の記事の中には、1941年12月25日の日本軍による香港占領に至るまでの18日間の戦闘の様子や、日本軍の攻撃に怯える香港社会の状況などが詳細に記録されたもの、また日本軍による占領政策が香港社会にもたらした影響が具体的かつ段階的に把握できるものも多数含まれており、現地発行の新聞資料の資料的価値を改めて実感した。

また同時に、近年、香港で発表された、日本占領下の香港に関わる研究論文の調査・収集も行った。さらに、香港大学、香港文物探知館等において、日本占領期に関



香港中央図書館



香港文物探知館

する「記憶」が、どのような形で、現在の香港社会に伝わっているのかについて、「噂話」や「怪談」（その舞台とされる場所）も含めて、調査を行った。例えば、日本占領期に日本軍の「慰安所」とされた洋館には、今でも少女の幽霊が出るという「怪談」（「噂話」）が、香港には伝わっているという。今回の調査では、そのような「怪談」がどのようなバリエーションをともなって語り継がれているのかを考察するために、「怪談」が掲載された文献資料の調査・収集を行い、「怪談」の舞台となっている洋館周辺の実地調査を行った。現在、「歴史」と「記憶」の関連性については、様々な角度から研究が行われているが、民衆の体験を「社会的記憶」として伝えていく際に、「怪談」や「噂話」がもった役割についても注目が集まっている。今回の調査によって採集した香港での「怪談」（「噂話」）についても、同様の観点からの考察が可能であると思われる。「噂話」をめぐる社会学や文化人類学の理論を援用しながら、今後、分析をすすめていきたい。

次に第2の目的である「客家」の習俗に関する調査について。「客家」とは、中国の広東省を中心に広西省、福建省、江西省などに住む移住民で、在来の住民から区別されてきた住民を指すが、台湾にも居住しており、台湾の漢民族社会では比較的少数者として位置付けられている。私は、日本の植民地統治下の台湾での少数民族政策（台湾原住民政策）を研究の一つの柱としてきたが、その際、漢民族系住民との関連を考察することの重要性を痛感してきた。香港には「客家」の習俗、とりわけ大きな特徴をもつといわれる居住形態が、かなり伝統的な形で存続している地区があるため、今回の調査では、その代表的な地区である錦田吉慶園などを訪れ、実地調査を行った。さらに、香港の新界地区における在地の住民の風俗について、詳細な展示を行っている屏山鄧族文物館を訪れ、当該地区の住民の風俗が、イギリスの植民地支配、日本の占領によって、どのような影響を被ったのかについて調査を行った。



屏山鄧族文物館



錦田吉慶園